

子供黨列傳 (三)

山上憶良・その他

石 井 庄 司

子供黨としての憶良の面目は「銀も金も玉もなにせむにまされる寶子に如かめやも」の一首によつて十分窺はれることは、既に前回に説いたところであるが、なほ憶良の全作品をみるに、子供に關するものが多く、愈々憶良をして子供黨としての本領を發揮させる。

「老身重病年を経て辛苦す、及び兒等を思ふ歌」の中には、自分の生活の苦しさを述べて、「特別に痛い瘡には辛い鹽をふりかけるこいふ諺のやうに、或は、甚だ重い馬荷に上荷をつけて益々重くするこいふ諺の通りに、年をこつた我が肉體の上に、病氣まで加へたから、晝は一日中歎き暮し、夜は一晚中溜息をつき、永年の間ずつこ病みつけてゐるから、幾月もつけて悲しみ泣き、事々に死んでしまひたいと思ふけれども」、こ云つて、次に「五月蠅なす騒ぐ兒等を棄てゝは死は知らず」(夏の蠅のやうに騒ぐ我が兒を打ちすてゝは死ぬこも出來ず)を詠んでゐる。親の情としては當然のこゝではあるが、かくまで切實に親の子を思ふ情を詠み得たこゝろに、憶良の面目躍如たるものがあると思はれる。なほ「……見つゝあれば心は燃えぬ、かにかくに思ひわづらひ哭のみし泣かゆ」を結んでゐる。なほ反歌の中に、
衛もなく苦しければ出で走り去なゝこ思へこ兒らに障りぬ。

さいふのがある。「出で走り去な、こ思へ、兒らに障りぬ」云つて、子供を邪魔ものゝやうに詠んではゐるが、その裡に子供への愛の無限なるこを含ませてゐるこ、一誦して十分了解するこが出来よう。憶良の煩惱人たる姿であり、また世の子供黨の姿でもある。多くの萬葉歌人の中にあつて、かやうな作を爲し得たこころの山上臣憶良を想ひ、親愛の情を禁じ得ないのである。

「日本挽歌」の中に、遠い筑紫の國まで妻の慕つてきたこを詠んで「泣く子なす慕ひ來まして」云つてある。「泣く子なす慕ひ來まして」の句は、大伴坂上郎女の作中にもあるが、憶良の作の方が、少し時代は先である。恐らく憶良の始めて用ひた句であらう。僅かに一句の言葉ではあるが、面白い言葉である。子供の生活に注意し、親しんできた人の言葉さいふこころができよう。

「感情を反さしむる歌」のはじめに「父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし愛し」さいふ句がある。後年大伴家持の作（史生尾張少酢を教へ諭す歌）に踏襲された言葉であるが、「妻子見ればめぐし愛し」こ、妻と共に子に對する愛を素直に表白したこころに注意される。「父母」さいへば、すぐ「妻子」さいふのは極く普通の言葉のやうではあるが、萬葉集の中では、家持の模倣的使用の外には、憶良だけしか用ひてゐないのである。憶良のはもう一つは「筑前國志賀の白水郎の歌」の中に用ひてゐる。それから有名な「貧窮問答の歌」の中に「父母は飢ゑ寒からむ、妻子もは乞ひて泣くらむ」こか、「父母は枕の方に、妻子もは足の方に、團み居て愛ひ吟ひ」こか詠んでゐる。

このやうな片言隻語の中にも、憶良が思ひきつて、子への愛情を詠みあげて、子供黨としての眞面目をあらはしてゐるこを注意したのである。

なほ萬葉集に就いて、子の愛を示した言葉を求めてゆくと、憶良よりは少しく古い歌聖柿本人麿の作中に、亡妻の遺兒

を世話する男の有様が詠まれてゐるのを見る。「吾妹子が形見に置ける、若き兒の乞ひ泣く毎に、取り與ふ物し無ければ、男じもの腋ばさみ持ち……」こある。然し、この作は「妻死せし後、泣血哀慟し作れる歌」三題詞にある如く、主題は妻にあり、子に對する愛の情に於ては、憶良の作に遠く及ばない。そして又しても、憶良が子供黨の歌人にして第一人者であつたこを痛感するばかりである。

萬葉集には多數の女性作者があるのであるが、子の愛を詠んだ作は少い。まつ大伴坂上郎女が旅先から「宅に留まれる女子の大嬢に贈賜れる歌」ぐらゐであらう。

常世にトコヨ 吾が行かなくに 小金門かねかどに もの悲しらに おもへりし 吾が兒の刀や自をぬばたまの 夜晝よるひるさいはず おもふにおもし 吾が身は瘦やせぬ 嘆なげくにし 袖さへぬれぬかくばかり もこなし戀こひば ふるさきに この月つき頃ころも ありかつましじ

反歌

朝髪あさかみの思おもひみだれてかくばかり なねが戀こふれぞ夢ゆめに見えける。

この作は、「娘から進なつた歌うたに報こたへて送こつた歌」さいふここである。もはや相當の年齢の娘であらう。なほ坂上郎女は、この娘が結婚して、越中國の夫家持の許にあるのに贈つた作には「海神わたつみの神の命いのちの、御櫛みしげ笥びに貯たくわひ置おきて、いつくさいたま珠たまに勝かりて、思おもへりし吾わがが子こにはあれぞ……」さいふ言葉がある。娘を結婚させた母親の情が出てゐる作であるが「珠たまに勝かりて思おもへりし吾わがが子こ」さいふのは、さうも「銀も金も玉も何せむに」さいふ言葉あたりにお蔭かげを被かつてゐる言ことひ方のやうに思おもはれる。またしても憶良のこを思はせられる。

かうして見て來るき、女性の作うたにして光あつた作は、天平五年遣唐使の船ふねが難波なにわを出發して行く時、「親母の子に贈れる

歌一ある一首であらう。

秋萩を 妻問ふ鹿こそ ひまり子に 子持たりさいへ 鹿兒じもの 吾がひまり子の 草枕 旅にし行けば 竹珠を 繁
に貫き垂り齋戸に 木綿取り垂で、 齋ひつ、 吾が思ふ吾子 眞幸くありこそ

反歌

旅人のやぎりせむ野に霜降らば吾が子はぐくめ天の鶴群

「秋萩を妻問ふ鹿は、ひまり子を持つてゐるさいふが、その鹿のやうに、たつたひまりの吾が子」

さいふあたりは、如何にも素朴な口吻で興味が深い。恐らくこの母親は鹿の棲む野山にある人であらう。そのひまり子の旅立ちにあたつては「竹の珠を澤山貫いて垂らし、清淨な神酒の器に木綿を垂らして神を齋き祀つて、自分の愛する子の無事であるやうに」、ひたすら祈るのである。敬虔な心情の溢れた作である。此の素朴にして敬虔な心根は、更に反歌に於いて強烈な母性愛となつて逆るのである。「旅人の宿をさる野原に霜が降つたならば、自分の子をはぐくんでお呉れよ、天の鶴群を呼びかけたさころなき、實に深く強き母の情に心打たれるのである。これは非常時の作であるが、この母の平常もさこそ思はれる。子供黨列傳さいふこの文にはふさはしくないかも知れないが、本當に我が子を愛する情の出てる作として、また非常時の昨今を思ひ合はせて、感慨の深いものがある。